http://decfamily.p1.bindsite.jp/2013NEW/

We 25R

No.270　13/10/17

現代文学の金字塔

ここのところ進路の話ばかりしているようだが、今はそういう時期なのだからしょうがない。人生には（というと大げさで「高校時代には」くらいが適当か…）そういう時期が必要なのである。

例えば、何か原稿を書かなければならないような時に、締め切りが近づくまでそのテーマについて、クルマを運転しながら・風呂に入りながら・散歩しながら…など、ちょっとずつ意識し続けていると、何となく書くべきことがまとまってきたりする。進路のこともそれと同じで（というと失礼かも知れないが）、やはり少しずつ考えたり、調べたり、話し合ったりしているうちに、本当にやりたいことが具体的な形となって見えて来たりするものだ。あるいは、この科目にした方がよいと閃いたりするのである。この秋はそういう季節だと腹を決めて、前向き、かつ素直に取り組んでほしい。

＊

とはいっても「秋」である。部活の最後の仕上げの時期来ている人もいるだろうし、春の大会に向けて、今こそ力を伸ばすチャンスと感じている人もいるだろう。来年の今ごろは、本当にもう受験しか目の前になくなってしまう。「静」の時期だからこそ、自分自身を深める時期でもある。進路のことを意識しながらも、自分にとって２年生の今やらなければならないことは何なのかを考えて、それにも積極的に取り組もう。

で、国語科の教員としては当然読書にも取り組んでもらいたい。以下は、悲しい事件に見舞われた大好きな姉（15歳）と、それを何とか慰めようとする弟（14歳）との会話。

＊

ぼくはベッドに寝ころがって、バスタブに湯が一杯になっていく音に耳をすませた。それから起き上がって、バスルームのドアのところへ行き、何か要るものがあったら持ってきてあげると言った。

「ありがとう」彼女は低い声で言った。「外へ行って、昨日と、それから今日の大部分を持ってきてちょうだい」彼女は言った。「それを返してほしいわ」

「それだけかい。昨日と今日だけ？」

「それだけよ」彼女は言った。「恩に着るわ」

「ぼくにできれば、そうするよ。フラニー」ぼくは彼女に言った。彼女がゆっくりバスタブに沈むのがわかった。「あたしは大丈夫」彼女は囁いた。「あたしのなかのあたしは誰も取りはしなかった」

「愛してるよ」ぼくは囁いた。

＊

私はこの作品が現代の文学の最高傑作だと思っている。村上春樹もこの作品（作者）から大きな影響を受けていて、なるほど羊男が登場するわけだと納得できたりする。文庫本で上下２巻、それぞれ400ページの長編ではあるが、第一章（90ページ）だけでも感動できる。ジョン・アーヴィング『ホテル・ニューハンプシャー』（新潮文庫）。ストーリーや文体、人物、伏線、テーマと、文学の想像力がすべてつまっていて、しかも読みやすい。（中野圭二の訳も素晴らしい）一読した時よりも再読した時に、再読した時よりも三読した時に感動が深まっていく真の傑作である。